資本主義論序説

有賀定彦著

ミネルヴァ書房

≪著者紹介≫

有賀（ありが） 定彦（さだひこ）

1928年　生まれ
1952年　九州大学経済学部卒業
　　下関市立大学教授をへて
現　在　長崎大学教授（経済学部）
編　著　『世界経済の構造と展開』ミネルヴァ書房，1979年
現住所　長崎市中川1丁目5-25-105

資本主義論序説

1983年5月20日　初版第1刷発行　　検印廃止

定価はケースに
表示しています

著　者　有賀定彦
発行者　杉田信夫
印刷者　本間昭之助

発行所　株式会社　ミネルヴァ書房
京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話京都(075)581—5191番(代)
振替口座・京都2—8076番

©有賀定彦，1983

中外日報社・酒本製本

3033-43034-8028

Printed in Japan

はしがき

マルクスの経済学研究の「プラン」によれば、『資本論』は、マルクスの問題意識からしても、その目的の一部であって、資本主義を全体として把握する理論体系を構築するためには、さらに新たな論理の展開が必要となる。そして、この「体系」を構築することは、とりわけ世界経済論を専攻する者にとって必要となろう。だがこの作業は、マルクスが生きていて「経済学批判体系」を書き上げたならば、どのようになったであろうか、という発想からは生産的な成果はえられまい。

資本主義が資本主義であるかぎり、一九世紀であろうと、現代であろうと、その原理にいささかの変りはなかろう。だがそうはいっても、原理そのものの認識は、けっして固定された教条ではあるまい。マルクスは『経済学批判への序説』において、「人間の解剖は、猿の解剖のための一つの鍵である」（『マルクス・エンゲルス全集』第一三巻六三六ページ、邦訳六三二ページ）とも、「ブルジョア経済は古代その他の経済への鍵を提供する」（同上）ともいっている。また一八六八年三月二五日付エンゲルスあての手紙でも、マルクスはつぎのようにいう。「人類史においても事情は古生物学におけるのと同じようなものだ。鼻先にある事物でも、原理上、一種の判断力の欠如によって、最もすぐれた頭脳にさえ見えないのだ。その後、時代が変わってから、人々は、まえには見えなかったものが至るところでまだその痕跡を示している、ということを不思議だと思う」（『マルクス・エンゲルス全集』第三二巻五一ページ、邦訳四三ページ）。このマルクスの事物の認識についての考え方は、この作業にも生かされるべきではなかろうか。

資本主義の「原理」の構築にあたっては、一九世紀中葉では認識しえなかったのに、その後の資本主義の発展につれて顕現化したことによって認識しうるものをも対象に含めて構築することが必要であろう。それは、マルクス以後現代にいたるまでの資本主義の歩みを射程にいれたうえで、資本主義の存立構造と運動とを体系的に明らかにするという作業になる。こういった作業を、私は「『資本論』から『資本主義論』へ」というのである。したがってこの作業は、レーニンの『帝国主義論』や『現代資本主義論』の体系化を頭において、『資本主義論』を構築してゆくという作業になるし、また『資本主義論』の体系化は、『帝国主義論』を見直し、『現代資本主義論』を構築してゆくという作業にもつうずる。

ところで、資本主義の存立構造と運動を明らかにするという作業は、経済学に「解剖学としての経済学」と「生理学としての経済学」との二つの方法を要求するのではなかろうか。『経済学批判への序説』における「経済学の方法」で、マルクスは、「経済学の体系」をいわゆる「上向法」にもとづいて、資本主義における「諸範疇の編制」という視点からとらえる。それはまた、価値法則の上向による資本主義の物象化の存立構造を明らかにする作業だといってもよい。マルクスは、この方法の経済学を「解剖学としての経済学」と位置づけた(『マルクス・エンゲルス全集』第一三巻八ページ、邦訳六ページ)。だが、「経済学の方法」は、「この方法」だけでよいのだろうか。マルクスの『資本論』をみても、資本主義の「存立構造」という視点からだけではなく、その「運動」や「必然性」、また「歴史的なもの」や「非資本主義」までもが考察の対象におかれている。この後者の考察を付論としてではなく本論としてとらえるためには、論理的に上向して成立したある「範疇」が検出された論理次元での資本主義の運動の必然性と「範疇」それ自体の歴史的考察、さらに「非資本主義」の包摂が理論体系のなかに位置づけられねばなるまい。そして、資本主義の物象化の存立構造は、資本主義の運動の結果としての「破局」において、その実体を白日の下にさらしだされることになる。この後者の経済学を、私は「生理学としての

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

経済学」という。唯物史観でいう「生産諸力と生産諸関係との矛盾」・「生産諸関係が生産諸力の発展形態からその桎梏に一変する」というテーゼは、資本主義の「運動」・「破局」という論理において明らかにされる。

したがって、資本主義を研究対象とする経済学の体系は、資本主義の存立構造をとき明す「解剖学としての経済学」と資本主義の運動を解明する「生理学としての経済学」とが、前者が縦軸、後者が横軸となって、資本に始まり世界市場にいたる体系のなかで、交差しつつ構築されるのではなかろうか。

このような問題意識をもって、ここ十数年のあいだに発表してきた諸論文を総括したのが本書である。「各章」と（初出論文）との関連をつぎに示しておこう。

第一章「初期マルクスと疎外論」・第二章「物象化と市民社会」（「マルクスにおける『疎外』と『物象化』」〈下関市立大学『下関商経論集』第一六巻第二号、一九七三年二月〉ならびに「市民社会と唯物史観（1）」〈『同上誌』第一六巻第三号、七三年三月〉を上記の章のテーマのもとに新たに書き直した）。

第三章「唯物史観と『プラン』問題」（長崎大学経済学部『経営と経済』第五九巻第三号、七九年一一月）。

第四章「『資本論』から『資本主義論』へ」（『同上誌』第五九巻第四号、八〇年三月）。

第五章「『資本主義論』における物象化の諸範疇」（『同上誌』第六〇巻第一号、八〇年六月）。

第六章「資本主義の運動と外国貿易」（『現代資本主義と南北問題』第一章〈長崎大学東南アジア研究所、東南アジア研究叢書15、八一年三月〉）。

第七章「国際価値論の位置づけ」（長崎大学経済学部『経営と経済』第六二巻第一号、八二年六月）。

第八章「資本主義と非資本主義」（長崎大学東南アジア研究所『東南アジア研究年報』第二三集、八二年一二月）。

第九章「世界資本主義における矛盾転嫁のメカニズム」（『現代資本主義と南北問題』第二章〈前出〉。この論

文は、「フランクの『新帝国主義論』の検討」〈『現代の理論』七五年一〇月号〉を上記の章のテーマのもとに新たに書き直した)。

第一〇章「原理・原型・段階」(『現代資本主義と南北問題』第三章〈前出〉を上記の章のテーマのもとに新たに書き直した)。

第一章から第四章までが、『資本主義論』の方法論にかかわり、第五章からが各論になる。

ミネルヴァ書房の高橋邦太郎氏より本書執筆のおすすめがあってから、十数年の歳月がたった。その間、考え悩むことのみ多く、作業は一向にはかどらなかった。まだ研究がたりず、また論及していない分野も残されてはいるが、仕事の区切りをつける意味もあって、このさいひとおもいに刊行することにした。大方の叱正をえて、これからの勉強の励みにしたいと思う。

最後になったが、永年にわたる高橋邦太郎氏の御寛容と励しに、心から御礼申し上げる。

一九八三年三月三〇日

有賀定彦

目次

はしがき

第一章　初期マルクスと疎外論
第一節　初期マルクスと諸疎外……一
第二節　疎外論の論理構造と弁証法……七

第二章　物象化と市民社会
第一節　疎外論から物象化論へ……一一
第二節　「市民社会」概念の展開……二〇
第三節　『ドイツ・イデオロギー』と「持分問題」……二八
第四節　世界市場と破局……三二

第三章　唯物史観と「プラン」問題
第一節　唯物史観の定式……四二
第二節　生産諸力と生産諸関係との矛盾……四六
第三節　市民社会と国民経済……五一
第四節　生産諸力と生産諸関係との矛盾の世界的展開……五六

第四章　『資本論』から『資本主義論』へ
第一節　マルクスの「経済学批判体系プラン」……六三
第二節　「宇野理論」の方法論……六七
第三節　解剖学としての経済学……七三
第四節　生理学としての経済学……七八
第五章　『資本主義論』における物象化の諸範疇
第一節　資本（一）――資本一般……八四
第二節　資本（二）――土地所有・賃労働……九五
第三節　国家……九八
第四節　外国貿易……一〇一
第五節　世界市場と恐慌……一〇三
第六章　資本主義の運動と外国貿易
第一節　資本蓄積の運動と社会的分業の展開……一〇六
第二節　国家・市民社会・国民経済……一一五
第三節　外国貿易の必然性……一一九
第四節　「外国貿易の必然性」をめぐる吉村氏、松井氏の見解について……一二五
第七章　国際価値論の位置づけ
第一節　これまでの国際価値論争の反省……一三三

第二節　価値法則のモディフィケーション……一三五
第三節　国際的価値……一四二
第四節　国際価値論の位置づけ……一四九

第八章　資本主義と非資本主義

第一節　リカァドオの比較生産費説と国際分業……一五五
第二節　再生産表式と外国貿易……一六五
第三節　資本主義と非資本主義……一七六

第九章　世界資本主義における矛盾転嫁のメカニズム

第一節　先進資本主義国と関係する後進国のたどる二つの途……一八六
第二節　A・G・フランクの「低開発の発展」論……一八八
第三節　マルクスとフランク説……一九四
第四節　資本主義の発展段階とフランク説……一九九

第一〇章　原理・原型・段階

第一節　原理・原型・段階……二〇六
第二節　資本主義の存立構造と運動……二一一
第三節　独占段階の資本主義……二二四
第四節　資本主義の新しい段階としての現代資本主義……二三一
第五節　現代資本主義の最後の範疇としての「世界恐慌」と「南北問題」……二三七

第一章　初期マルクスと疎外論

第一節　初期マルクスと諸疎外

初期マルクスの「初期」を特徴づける論理は疎外論である。

一八四一年三月、ベルリン大学を卒業したマルクスは、一八四二年一〇月から四三年三月にかけて、『ライン新聞』編集長の職についた。マルクスは、ここで「理性的自由の実現」をめざしてプロシャ国家と格闘したが、まだヘーゲルの観念論哲学の制約のもとにあり、いわば革命的民主主義の次元から脱していなかった。マルクスがフォイエルバッハの強い影響をうけ、ヘーゲル法哲学の批判にとりくんでいったのは、ライン新聞を辞してからであった。一八四三年執筆の『ヘーゲル国法論の批判』から、四四年『独仏年誌』所載の『ユダヤ人問題によせて』、『ヘーゲル法哲学批判序説』にいたって、初期マルクスを特徴づける疎外論は、次第に明確な論理をとるにいたった。それはまず、政治疎外論と宗教疎外論としてあらわれた。

「ヘーゲルは国家から出発して、人間を主体化された国家たらしめ、民主制は人間から出発して、国家を客体化された人間たらしめる。宗教が人間を創るのではなくて、人間が宗教を創るように、体制が国民を創るのではなくて、国民が体制を創る(1)」。

「ドイツにとって宗教の批判は本質的にはもうおわっている。そして宗教の批判はあらゆる批判の前提であ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

る。……

反宗教批判の根本は、人間が宗教をつくるのであって宗教が人間をつくるのではない、ということである。……

宗教上の不幸は、一つには現実の不幸の表現であり、一つには現実の不幸にたいする抗議である。宗教は、なやめるもののため息であり、心なき世界の心情であるとともに精神なき状態の精神である。それは民衆の阿片である。

民衆の幻想的幸福としての宗教を廃棄することは、民衆の現実的幸福を要求することである[2]」。

このように、マルクスは、人間が国家と宗教にたいしてもつ意識構造を、まず「疎外」としてとらえ、政治的疎外や宗教的疎外からの人間解放の担い手をプロレタリアートにもとめた。それは、プロレタリアートこそが、「社会のあらゆる領域から自分を解放し、それを通じて社会の他のあらゆる領域を解放することなしには、自分を解放することのできない一領域、ひとことでいえば、人間の完全な喪失であり、したがってただ人間の完全な回復によってだけ自分自身をかちとることのできる領域[3]」としての身分におかれているからである。したがって、「哲学がプロレタリアートのうちにその物質的武器を見いだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神的武器を見いだす[4]」。ここから、プロレタリアート解放の物質的条件をさぐるための経済学研究がはじめられ、その所産として生みだされたのが、『経済学ノート』(一八四四～四五年)であり、『経済学・哲学草稿』(一八四四年)であった。ここにいたって、マルクスの疎外論は労働疎外論に帰結していった。

『経済学・哲学草稿』「第一草稿」〔四〕〔疎外された労働〕において、マルクスは「疎外された労働」につぎのような四つの規定をあたえる。

第一規定。労働生産物の疎外。労働者が自分の労働の生産物にたいして、ひとつの疎遠な対象にたいするよう

にふるまうという規定。生産の結果としての疎外。

「労働者が骨身を削って働けば働くほど、彼が自分に対立して創造する疎遠な対象的世界がますます強大となり、彼自身が、つまり彼の内的世界がいよいよ貧しくなり、彼に帰属するものがますます少なくなる、ということである。……彼の労働の生産物であるものは、彼ではないのである。したがってこの生産物が大きくなればなるほど、労働者はますます自分自身を失なっていく。労働者が彼の生産物のなかで外化するということは、……彼が対象に付与した生命が、彼にたいして敵対的にそして疎遠に対立するという意味をもっているのである」[5]。

第二規定。労働の疎外。労働者の生産的活動そのものの内部において現われる疎外。

「労働の外化は、実質的にはどこにあるのか。

第一に、労働が労働者にとって外的であること。すなわち、労働が労働者の本質に属していないこと。……労働者は、労働のなかでは自己の外にあると感ずる。……だから彼の労働は、自発的なものではなくて強いられたものであり、強制労働である。そのため労働は、ある欲求の満足ではなく、労働以外のところで諸欲求を満足させるための手段であるにすぎない。……最後に、労働者にとっての労働の外在性は、労働が彼自身のものではなくて他人のものであること……に現われる」[6]。

第三規定。以上二つの疎外規定からもたらされる、類からの疎外。

「人間は、まさに対象的世界の加工において、はじめて現実的に一つの類的存在として確認されることになる。この生産が人間の制作活動的な類生活なのである。……それゆえ労働の対象は、人間の類生活の対象化である。……それゆえ、疎外された労働は、人間から彼の生産の対象を奪いとることによって、人間から彼の類生活を、彼の現実的な類的対象性を奪いとり、そして動物にたいする人間の長所を、人間の非有機的身体すな

わち自然が彼から取りさられるという短所へと変えてしまうのである。

同様に疎外された労働は、自己活動を、自由なる活動を、手段にまで引きさげることによって、人間の類生活を、彼の肉体的生存の手段にしてしまう。

したがって、人間が自分の類についてもつ意識は、疎外によって変化し、類生活が人間にとって手段になる、というところまで変ってしまうのである[7]」。

第四規定。これまでの三つの疎外規定からの帰結としての、人間からの人間の疎外。

「人間が自分自身と対立する場合、他の人間が彼と対立しているのである。人間が自分の労働にたいする、自分の労働の生産物にたいする、自分自身にたいする関係について妥当することは、人間が他の人間にたいする関係についても、人間が他の人間の労働および労働の対象にたいする関係についても妥当する。

一般に、人間の類的存在が人間から疎外されているという命題は、ある人間が他の人間から、またこれらの各人が人間的本質から疎外されているということを、意味している[8]」。

ここでマルクスは、人が人として成り立ちうるためには、「それ」を無くしては成り立ちえない「それ」としての「類的存在」という概念を「労働」でとらえ、労働を「普遍」として位置づけた。一言で言うならば、人間とは労働だということである。そして、このような「人間」のとらえ方にもとづいて、以上四つの「労働疎外」規定をおこない、人間疎外論を提起した。だが、現状のある「事実」を疎外として認識しても、その疎外をもたらす原因と、その疎外からの回復の途が科学的にしめされなければ、疎外論はただ現状告発の問題提起の次元にとどまり、現実的な人間解放の理論たりえない。マルクスは、この課題についてどのようにこたえたか。

マルクスは自ら問う。「われわれは労働の疎外を、その外化を、一つの事実としてうけとり、そしてこの事実を分析したのであった。そこでわれわれは問おうとする。どのようにして人間は自分の労働を外化し、疎外する

ようになるのか、と。どのようにしてこの疎外は、人間的発展の本質のうちに基礎づけられるのか」[9]。だが、この問にたいするマルクスの積極的な解答はなく、『経哲草稿』ではつぎの説明がみあたるにすぎない。

「たしかにわれわれは、外化された労働（外化された生活）という概念を、私有財産の運動からの結果として、国民経済学から獲得してきたにちがいない。しかしこの概念を分析すると、ちょうど神々が本来は人間の知性錯乱の原因ではなく、その結果であるのと同様に、私有財産は、それが外化された労働の根拠、原因として現われるとしても、むしろ外化された労働の一帰結にほかならないことが明らかになる。のちになってこの関係は、相互作用へと変化するのである。

私有財産の発展の最後の頂点にきてはじめて、私有財産のこの秘密が、すなわち一方では、私有財産は外化された労働の産物であり、他方では、それは労働がそれによって外化される手段であり、この外化の実現であるということが、ふたたびはっきりしてくる」[10]。

マルクスはここで、私有財産が労働の疎外を生みだし、労働の疎外が私有財産をもたらすという、論理の悪循環に陥っている。したがって『経哲草稿』「第三草稿」〔二〕〔私有財産と共産主義〕で、マルクスの「自己疎外の止揚は、自己疎外と同一の道程をたどっていく」[11]という疎外からの回復の論理も、これでは、うまく理論化されるはずはなかった。私的所有にもとづく人間疎外からの回復としての共産主義も、内的必然性をもつものとしてはしめされず、その共産主義の概念も、つぎのように曖昧なものとなっている。

マルクスは、共産主義の第一形態として「私有財産の普遍化と完成」[12]であるにすぎない粗野な共産主義についてのべ、第二形態として、「民主的にせよ専制的にせよ、まだ政治的な性質をもっている共産主義」[13]や「国家の止揚をともなうが、しかし同時にまだ不完全で、まだ相変らず私有財産すなわち人間の疎外に影響されている本質をもっている共産主義」[14]をあげる。そして、「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主

義。……人間的な人間としての人間の……完全な自己還帰としての共産主義」[15]を第三形態の共産主義とし、この共産主義は、「完成した自然主義として＝人間主義であり、完成した人間主義として＝自然主義である」[16]とする。だがマルクスは、この共産主義をもついに、「共産主義はもっとも近い将来の必然的形態であり、エネルギッシュな原理である。しかし共産主義は、そのようなものとして、人間的発展の到達目標――人間的な社会の形成――ではない」[17]といって否定してしまう。

それでは、疎外からの回復にあたって、マルクスはなぜこのような論理の自己撞着に陥ったのであろうか。現代では、「疎外」という概念は「人間」という言葉とともにあたかも自明なもののように日常化しているが、ここであらためて「疎外論」それ自体のもつ論理構造を、「人間」のとらえ方とのかかわりにおいて考え直してみる必要があろう。

(1) K. Marx, Kritik des Hegelschen Staatrechts. *Werke* 1, S. 231.『全集』第一巻、二六三ページ。
(2) K. Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie, *Werke* 1, S. 378-379.『同上訳』四一五ページ。
(3) *Ibid.*, S. 390.『同上訳』四二七ページ。
(4) *Ibid.*, S. 391.『同上訳』四二八ページ。
(5) K. Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahere 1844, *Karl Marx-Friedrich Engels historisch-Kritische Gesamtausgabe*, im Auftrage des Marx-Engels-Instituts, Moskau, Herausgegeben von V. Adoratskij, Erste Abteilung, Bd. 3, Verlag Detlev Auvermann KG Glashütten, im Taunus, 1970, S. 83-84. 城塚登／田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫版、八七～八八ページ。
(6) *Ibid.*, S. 85-86.『同上訳』九一～九二ページ。
(7) *Ibid.*, S. 88-89.『同上訳』九七ページ。
(8) *Ibid.*, S. 89.『同上訳』九八ページ。
(9) *Ibid.*, S. 93.『同上訳』一〇五ページ。
(10) *Ibid.*, S. 91-92.『同上訳』一〇二ページ。

(11) *Ibid.*, S. 111.『同上訳』一二六ページ。
(12) *Ibid.*, S. 111.『同上訳』一二七ページ。
(13)(14) *Ibid.*, S. 113.『同上訳』一三〇ページ。
(15) *Ibid.*, S. 114.『同上訳』一三〇ページ。
(16) *Ibid.*, S. 114.『同上訳』一三一ページ。
(17) *Ibid.*, S. 126.『同上訳』一四八ページ。

第二節　疎外論の論理構造と弁証法

疎外論とは、それがどのような内容の疎外をとりあげようと、「人間疎外論」以外のなにものでもない。そして、このような疎外論が人類の思想史において明確な論理をもって現われたのは中世のキリスト教神学だといえる。そこにおいては、神から人が離れてゆくことが疎外であり、神のもとに戻ってゆくことが疎外からの回復とされていた。つまり、疎外とは本来あるべきものがその本来的なものを喪失して非本来的なものになるということであり、疎外からの回復ということは、非本来的なものが本来的なものに戻ってゆくという論理であった。この型の疎外・回復の論理は、疎外論の原型ともいうべきものであって、これを疎外論の第一形態とよんでおこう。この型の疎外論は、一般的には、まえにのべた論理にさらに疎外された非本来的なものから本来的なものが逆に規定され、支配されるという論理がつけくわえられて流布されている。

このように疎外論は、「人間の解放」としてではなく、「本来的な人間」の設定を論理の不可欠な前提とする「人間性の回復」の論理として、神学から観念論として誕生した。なぜならば、観念論からは、「本来的な人間」を観念的に規定しうるし、疎外からの回復も観念によって可能となるからである。すなわち、疎外論は宗教から

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com